

一 「釜ヶ崎」という地名はどうしてついたか

「釜ヶ崎」というと騒動が発生するたびにマスコミなどに騒がれて、全国的にもすっかり有名な町になってしまった。しかし、釜ヶ崎というところは名の売れている割には広くはなく、ある意味ではほんの一握りの地域といつてよい。事実、西成区の東北部に位するわずか〇・六二平方キロの狭小なブロックにすぎない。試みに、難波から南海電車に乗って新今宮駅を過ぎると、もう「あいりん地区」のド真ん中を走っており、しかもそこはほんの一瞬のうちに通過してしまふ。しかし、釜ヶ崎に行くには多くの人は地下鉄御堂筋線を利用している。これも難波から阿倍野方面に向かってわずか二駅目、距離にして三キロ少々、「動物園前」という駅で下車するのである。そこから階段を登って外に出ると、パチンコ屋、喫茶店、めし屋、立ち飲み屋、ドヤ（簡易

旅館）、古着屋などがずらりと軒を連ねている。さらに奥に入っていくと、道端には昼間から酒を飲んで倒れて寝ている人も目にうつる。大阪市ではこの付近一帯を商業地域に指定しているが、裏通りはコンクリートが痛み、なんとなくすさんだ雰囲気肌にまで伝わってくる。初めての人ならたいがいそれに恐れおののくのである。

ところが、釜ヶ崎とは初めからこんな町だったのではない。実をいうと明治三十年代のころ、わが国の資本主義が独占段階に入り、帝国主義に変質しはじめ、中国大陆や朝鮮半島に植民地を求めだしたところのことである。それまで商都大阪から忘れ去られ、わずかに数軒の農家しかなかった西成一带が、国内の新植民地として急に開発されることになったのである。それまで大阪市の北部で伸びていた資本が、新しく工業用地を求めて、大阪西南部の低湿地帯に進出してきたのである。こうして、東京の山谷と並んでここに新しいスラム街が形成されていくことになる。

その後、釜ヶ崎はわが国資本主義の発展にテンポを合わせて、膨張の一途をたどったのであるが、ともかく競争社会が生んだ病んだ地域として、大正末期、昭和初期にかけて急速に肥大化していったのである。太平洋戦争ではB29の爆撃によって、釜ヶ崎の中心部は丸焼けになるなど大きな変化はあったが、朝鮮戦争を境に再びドヤが建設されはじめ、もう一度、スラム化への道を歩むことになる。そして、昭和三十六年（一九六一年）八月一日、釜ヶ崎で三〇〇〇人にもおおよ

日雇労働者によって騒動が起こされるまで、世間からも、行政当局からも全く取り残され、見捨てられたブロックとして存続してきたのである。

さて、釜ヶ崎は今日に至っても、夏が近づくと、きまって激しい騒動が起きている。それは、多くの場合、手配師問題から発生しているが、根本的には環境整備が行なわれていないからと見ることができし、また、スラム街から新しい労働者街への脱皮をはかるための胎動と見ることもできる。さらに、釜ヶ崎がまだまだ深刻な問題を内包している証拠と捉えることもできよう。いずれにしても、釜ヶ崎で騒動が起きるということは、スラム化して七十余年の歴史のなかで、大正七年（一九一八年）、富山県に端を発し、大阪ではトップを切って起きた西成の米騒動以外になかったことである。

近年、頻繁に起きる騒ぎについて、マスコミは「西成また騒ぐ」とか、「あいりん地区で赤軍派、手配師と乱闘」など、そのつど異なった地名をキャッチフレーズとして紹介している。「西成」といったり、「あいりん地区」と書いたり、「釜ヶ崎」と呼んだり、さまざまな地名を用いて表現しているが、いったいどれが正しいのだろうか。長年、ここに住んでいる人でさえ、ほとんどがそれを知らない。試みに、西成区の地図を開いて見ても「釜ヶ崎」とか、「あいりん地区」という地名は、正式な地名としては書き込まれていないのである。特に「あいりん地区」という地

名については、どういう意味からかは知らないが、記入されたものを見たことがない。

また、「西成」といってもずいぶんと広く、鶴見橋商店街、天下茶屋の住宅街、津守や玉出の工場地帯も含まれている。だから、「西成また騒ぐ」というキャッチフレーズは、必ずしも的を射た表現とはいえないのである。さらに、「あいりん地区」は地図上に記入されていなくても、太子一―二丁目（旧東田町）、山王町一―三丁目（旧山王町二―四丁目）、天下茶屋北一丁目（旧今池町）の商業居住地域、それに萩之茶屋一丁目（旧東入船町、西入船町）、萩之茶屋二丁目（旧海道町、甲岸町）、萩之茶屋三丁目（旧海道町の一部、東萩町）、花園北一丁目（旧東四条）のドヤ街、加えて、通称、三角公園といわれている東萩町公園の南側に当たる天下茶屋北二丁目（旧曳船町）の居住地域を指すことは、住民サイドにおいても周知のところである。しかし、全国的に高名な「釜ヶ崎」という地名は現在では存在せず、また、一般に「釜ヶ崎」といわれている地域も、実は必ずしも「あいりん地区」を指すとは限らないのである。

事実、「ジャンジャン横丁」といわれて有名な浪速区なみさくの「新世界」周辺までも、「釜ヶ崎」と呼ぶ人があるが、逆に釜ヶ崎の奥座敷に当たる山王町三丁目の旧飛田遊廓は、昭和十八年（一九四三年）に住吉区から分離され、西成区に編入された地域ということもあってか、「釜ヶ崎」と呼ぶ人はまれである。今日、「釜ヶ崎」というブロックは西成区の一隅を指していることには間違

いはないが、本当はかつて「今宮スラム」といわれていた地域をいうのではないかと思われるが、それも必ずしも明確ではない。しかし、それよりも大きな疑問は、「釜ヶ崎」という地名は実際にあったのか、どうかということである。仮に、「釜ヶ崎」という地名が幻の地名ではなかったとすると、それはいつごろ、どのようにして付けられたのか、また、それがいつごろどういっわけで消え去ったのか、釜ヶ崎にかかりを持つ人にとってはなほ興味深いところである。

この町に古くから伝わる「釜ヶ崎」という地名の由来については、およそ次の二説に集約できる。

一つは「食い詰めた者が、朝早く飯釜を質屋に入れてその日の車馬賃をこしらえ、夕方、仕事を終えて帰ってくると、何をさておいても飯釜を質受けする。釜が先だ」ということで、天下に名高い「釜ヶ崎」という地名が誕生したという説がある。たしかに、明治末期から昭和初期にかけて一大スラムであったこの地で、飯釜の入賃ぐらい別にはばかりなことでもなかったであろうし、いかにも最もらしいいぐさである。

他の一つは「この町で、朝風呂にはだれが一番先に入るかという」と、それはオカマ（男娼）が先だ！というところで、「釜ヶ崎」になったというのである。なぜ、オカマが朝早くから銭湯へ

行くかという、衛生的な面からだけでなく、湯船で裸の客を品定めしてから誘惑することにあるといわれている。これも地域性のある一面をよく出した説といつてよい。また、大正時代にはこの町にオカマの学校があつて、全国に男娼を供給していたという人もある。だが、いくらオカマが多いといっても、男娼と釜ヶ崎に関する説はどうも信憑性^{しんぴやう}に乏しい。

しかし、釜ヶ崎の父といわれていた郡昇作氏（西成労働福祉センター、元職業紹介部長）は、これらの俗説を否定し、「私が持っている明治末期の釜ヶ崎の地積図によると、西成区の一角に『釜ヶ崎』という地名があつて、畑地、水田、その他の別と五九一番地から七六五番地までの地番が書き入れられている」と述べている。さらに、郡氏は「その地積図に書き入れられている『釜ヶ崎』とは、現在、国鉄環状線の新今宮駅と南海電車の新今宮駅が交差する南側、今日では東入船町、西入船町に当たるところである」とも話していた。その東入船町、西入船町とは昭和四十八年（一九七三年）十一月一日から「萩之茶屋一丁目」と呼称されるようになったところである。

事実、「釜ヶ崎」という地名は大正六年（一九一七年）九月一日、この地が属していた大阪府西成郡今宮村が「今宮町」に昇格したとき、あまりよい地名ではないということで、今宮町議会で「水崎町」と呼称変更されたといわれている。現在、あいりん地区から大阪国鉄環状線を越えた浪速地区に水崎町という町があるが、これは今宮町議会がそのとき呼称変更した町名^{なづ}の名残で

ある。また、郡氏が指摘しているところの東入船町、西入船町に再度変更されたのは、このころよりさらに後のことである。

かつて、幻の地名とさえいわれていた「釜ヶ崎」という地名は、郡氏が保存されていた古い地積図によって、実際に存在した地名であることが実証された。しかし、「釜ヶ崎」という地名がいつごろどのような理由によって付されたかを知るとき、おのずと釜ヶ崎一帯のその昔が浮き彫りにされてくる。

ところで、改めてあいりん地区とその周辺の町を見直すと、旧町名の場合、不思議に海とかかわりがあることに気付くのである。まず、あいりん地区と国鉄環状線を境として隣接する浪速区には、かつて西成郡今宮村に属していた地域があり、今日でもなおスラム的要素を内包する馬淵町、水崎町、戎本町がある。国道尼崎平野線を渡って旧今宮スラムといわれる地域に入ると、このあたりはれっきとした陸地であるのに、昭和四十八年十月までは東入船町、西入船町、甲岸町、海道町、曳船町、東今船町と、まるで港町のような町名が付けられていた。しかし、釜ヶ崎一帯はずっと以前から、このように海とつながりのある町名となっていたのではない。大正六年、今宮村が今宮町に昇格したときに、町議会が「釜ヶ崎」という地名を葬るとともに、前町名（二部は違うが）に変更したのである。だが、町議会の単なる思いつきからではなく、歴史的にもかな

りの研鑽がなされてから、定められたと考えられる。

そもそも釜ヶ崎の「崎」という文字は、「みさき」「突き出た陸地」という意味を持ち、「尼ヶ崎」「長崎」「枕崎」などという地名でもわかるように、海に近いところに多く見ることができる。このように文字の上からでも、釜ヶ崎はその昔、海辺ではなかったであろうかという、今日では想像もつかないようなことが考えられるのである。そして、あいりん地区が少し東北部寄りの浪速区にある今宮戎神社付近を掘り返すと、いまでも古い貝殻が出てくるといわれている。そもそも戎神社は海神なのだから、それが陸地にあること自体がおかしいと思わざるを得ない。

大正十四年（一九二五年）、西成郡今宮町が廃止され、大阪市に編入されることになったとき、それを記念して出版された『今宮町志』によると、釜ヶ崎周辺は大昔「耶呉の浜」、または「耶呉の江」といったと記している。そして、この町史によると次に紹介する奈良朝時代によまれた古歌から推察しても、そのことは実証できると述べている。

住吉の名呉の海辺に駅なめて

玉ひろしく 露わすらへず

柿 本人 磨

奈、呉の浦の朝けのなこり今日もかも
磯の浦のわに乱れてあらむ

続古今集 藤原光俊朝臣

月出てて今こそかへれ名古の江に
夕べ忘るるあまの釣舟

古歌によると万葉の時代は今宮戎神社あたりを中心に釜ヶ崎付近を「那呉の浜」、または「耶呉の江」と呼んでいたことはほぼまちがいない。後になって今宮戎神社に近い、現在、電化製品の卸屋が軒を連ねている日本橋四―五丁目あたりを、「名護町（長町）」と呼称していたことでも実証できよう。それとは別に、古く大和朝廷時代に「豊葦原、瑞穂の国」といわれたのも、この那呉の浜といわれていた一帯ではなかったかとさえ思われる。

郡昇作氏は長い研究の結果、地下鉄界筋線の恵美須町付近が、古代日本の国際港として、中国

大陸や朝鮮半島にあった国々との交流に、重要な役割を果たしたという説を持っている。そして、釜ヶ崎は日本の表玄関だったと主張しているのである。たしかに女帝であった推古天皇の元年（五九二年）に、聖徳太子の誓願によって建った四天王寺が、釜ヶ崎に近い荒陵の地に移建されている。同時に海神である今宮戎神社も現在地に建立されている。そのころから難波津に入港する外国船や天皇の軍船は、今宮戎神社近くの海辺に接岸していたといわれている。

さらに、聖徳太子が政務をとっていたころ、このあたりから遣隋船、遣唐船、遣新羅船、遣百済船が出航したと見てよからう。そうすると、釜ヶ崎一帯は立派な国際港だったということもできる。このためにも、難波津と呼ばれていたところを、もう一度、洗い直してみる必要がある。このことが引いては、「釜ヶ崎」という地名の由来について、詳しく知る糸口になるかもしれないからである。

そもそも難波津は四世紀の中―末期、すなわち推古天皇の時代より二世紀半ほど前、仲哀天皇の後であったという伝説の人・神功皇后が朝鮮半島にあった馬韓、弁韓、辰韓の三韓を征伐した後、凱旋して上陸したところだといわれている。また、神功皇后の長子といわれる応神天皇は難波津の一角（大淀区あたり）に難波大隅宮を設け、さらに三韓征伐に功績があった人物を住吉神

社に奉ったという、しかし、この話はどうも信憑性に乏しいというのが、学界でも一致した意見である。

だが、このころ、「倭国」といわれていたわが国が、朝鮮半島に出兵したのは事実といわれている。それは朝鮮半島にあった製鉄技術を横取りするためであつたらしい。このことについてはわが国や朝鮮の歴史学者によつて究明されようとしているが、鴨緑江中流北の通溝というところに建っている高句麗好太王の碑銘によると「倭人、其の国境に満ち、城池を潰破し、奴客を以て臣と為せり、王に帰して命を請わん。云々」と刻まれているという。その碑銘の意味は、倭の軍勢に攻撃された新羅が、隣国の高句麗に援軍を求め、倭の軍勢を潰敗せしめたということだそうである。この史実は神功皇后が三韓征伐を行なったという時期と、どうやら一致するらしい。しかし、この碑銘の一部は日中戦争の最中、日本軍将校が石灰で埋めたとかで解読できなくなり、今日その埋められた碑銘をめぐって、論議が交わされている。

応神天皇に次いで即位した仁徳天皇は、現在、大阪府立高津高校に隣接する長岡と呼ぶ小高い丘の上に、難波高津宮を設けたといわれている。このころ、難波津の海岸線は現在、大阪市内の中央を南北に走っている堺筋あたりに沿つてあつたと見てよからう。すなわち堺筋以西の地域はまだ八十島というような州になつた海であつたのである。そして、伝説によると仁徳天皇が難波

高津宮の高殿に立つて周囲を望んだところ、民のかまどに煙が立っていなかった。そこで民の貧しさを知り、二年間の税の取り立てを中止した。二年後に再び荒廃した高殿に登つて望んだところ、かまどから煙が登つていたので、「民のかまどは賑わいにけり」といつて喜んだといわれている。この高殿から望んだことが事実だったとすると、難波高津宮があつた長岡という高台から、海岸線があつた堺筋あたりにかけての、わずか二キロにも満たない、葦の茂る小集落でなかつたろうかと推察できる。もし、それが反対側であれば、鶴橋から今里方面の平野となつていて広い地域であつた。しかし、二年間も免税して名君とたたえられた仁徳天皇は、崩御後、その遺体は堺市に設けられた前方後円の大墳墓に納められることになる。二年間は免税されたものの、この墳墓づくりにかり出された民衆の苦しみ、いかばかりであつたことだろう。

これより時代は二世紀も下つて、欽明、敏達、用明天皇へと移り、天皇家の権力は近畿から中国、九州方面におよぶものへと成長していった。そして、天皇家と並ぶ蘇我氏、物部氏などの豪族がいたが、天皇制は次第にゆるぎない地位を確立していった。さて、用明天皇二年（五八七年）、難波高津宮の近く「難波浦」と呼ばれていた堀江の船着場東岸に本堂伽藍だけの四天王寺が建立された。この四天王寺はかつて荒陵の地と呼ばれていた現在地に建っているものではない。もちろん、堀江の近くに建つていた四天王寺は、崇仏派の蘇我馬子の軍勢が、排仏派の物部守屋の軍

勢を河内国八尾市方面で打ち破り、そのとき大祖父に当たる蘇我馬子に従って闘った聖德太子（當時、厩戸皇子と呼ぶ）が、持国天、増長天、広目天、多聞天の四天王に誓願し、靈驗あらたかに勝利を収めたので、感謝の意味を込めて竣工したのである。

ところで、実際に用明天皇は奈良県桜井市にあった池辺雙槻宮を皇居としていたので、玉造付近にあったと思われる難波高津宮をどう扱っていたかはわからない。一説によると「京」というより、「宮」という存在ではなかったかといわれている。また、この時代に難波高津宮があったかどうかは定かでない。ただ、歴史的にも明白なことは、最初の四天王寺は用明天皇の時代に、どこかの堀江の近くに建立されたことはたしかである。

郡昇作氏の説をさらに発展させて紹介すると、幻の難波高津宮の近くにあった難波浦は、そのころ、海辺であったと思われる北浜の近く中之島付近から天満川を少し上流に登り、京橋あたりから大阪城東側にかけて掘り割りされた運河であったと思われる。大阪城東側というのをもう少し詳しく説明すると、現在の大阪国鉄環状線京橋駅付近から森の宮駅、玉造駅付近にかけてであって、京橋以南の地は戦時中、軍事工場があり、B 29に猛爆されたところである。さらに、昭和三十年ごろまで爆撃の跡はそのまま放置されており、夜ひそかに小舟を引いてスクラップをあさる「アバッチ」と呼ぶ連中も出没した、低湿地帯であったところでもある。

淀川というのもそもそもは仁徳天皇が運河として開発したのであり、難波浦が掘り割りされたのも長岡の一角である玉造付近に難波高津宮が建ち、そこに新羅、百濟、任那など朝鮮半島の国から、毎年来る朝貢船を迎え入れるためであった。また、天皇家の官船、軍船もここから出航した。これはうがった見方であるかもしれないが、欽明天皇の時代に百濟から仏教が伝来しているが、難波には祝津宮があったので、そのとき僧侶や仏像を運んできた船も、もしかするとこの難波浦に着いたのかもしれない。それよりも確実性のある話は物部守屋が仏像を堀江に捨てて、排仏を唱えたという史実が残っているが、その堀江というのはどうも大阪城東側にあった難波浦ではなかったかと思われる。しかも、森の宮の祭神が用明天皇であることから見ても、飛鳥時代には長岡の高台に難波宮があり、その東側に運河が引かれていたことはほぼ間違いないだろう。

しかし、堀江は上手からの土砂で少しずつ埋まり、船舶の航行が不能となったので、推古天皇元年（五九二年）、難波豊浦宮の東側にあった堀江の船着場を廃止し、新たに金ヶ崎に隣接する堺筋の恵美須町付近に、接船地が設けられたのである。現在、難波の大阪球場南側に「船出町」という町があるが、問題の難波の接船地はこの町だったということもできる。この船着場の移動に伴い、堀江の東岸にあった本堂だけの四天王寺を、長岡の南端にあった荒陵の地に移建した。同時にその鎮守としての今宮戎神社、広田神社が現在地に建立されている。

荒陵の地に移建された四天王寺には、金堂などの伽藍がらんに加えて高い五重の塔が建てられた。そして、瀬戸内から入ってくる外国の朝貢船、筑紫の大宰府だざいふとの連絡にあたる天皇の官船は、尼崎の大物浦、武庫浦あたりからこの高い五重の塔や、遠くに望む生駒山いこまを航海の指標として、難波津に急いだといわれている。このころ、現在の大阪市は堺筋あたり以西は海であったし、尼崎や西宮のいま工業地帯となっている海寄りの土地も難波津の入海であった。

郡昇作氏の研究結果によると、難波津の接岸地には住吉神社を中心とする住吉の浜、そこから少し北に登ったところに万葉の歌にも出てくる三津の浜、今宮戎神社あたりを中心とする那呉の浜の三港があったとしている。たしかに当時、住吉神社は高燈籠のそばまで潮が押し寄せてきており、一説によると斑鳩いかるがの里で政務をとっていた聖德太子は、まず大和川を小舟で住吉の浜に出て、そこから瀬戸内に向かう遣新羅使を送る新羅ルートを開発していたといわれている。事実、聖德太子は一時、新羅攻めを計画しているが、それは中止されており、配下にあった帰化人の秦氏はたが新羅と交流があったことも考え合わせると、必ずしも誤りとはいえない。しかも、大和川、住吉の浜、瀬戸内という組み合わせから見ても、十分に考えられることである。

住吉の浜からずっと北に登って、釜ヶ崎に近い那呉の浜に上陸した外国の使節は、その足で長岡と呼んだ高台にある四天王寺に参詣させられる。日本で最初に建った四天王寺の豪華な塔堂伽

藍を目前に拝した外国の使節は、そこで「倭国」と呼んで、ある意味で軽蔑さえしていた日本に対して、急に認識と理解を新たにする。もちろん、そのような気持ちになるように仕組まれていたものであることには間違いない。そして、四天王寺がある荒陵の地から左に難波津の青い海をながめながら、小高い丘になっている長岡を北上し、難波豊浦宮に迎えられるのである。ここでは「難波館」と呼ぶ立派な迎賓館で、盛大な歓迎を受け、やがて聖德太子のいる斑鳩へ、蘇我馬子が住む飛鳥あすかへ向かったのではなからうか。

また、他の説によると四天王寺は聖德太子の誓願によって建立したというものの、蘇我馬子の資力によって竣工したのであり、聖德太子よりむしろ蘇我氏の息がかかった寺院として、存続したという見方もある。そして、蘇我氏は飛鳥から逢坂あさか越えて四天王寺のある難波津に至り、さらに瀬戸内、玄海灘を渡って遣百濟使を送る百濟ルートを開発していたといわれている。それを裏付けるものとして、蘇我氏の配下であった帰化人の東漢氏やまのあやうじは、百濟と交流があったとされており、聖德太子と蘇我氏は対朝鮮半島政策においても食い違いがあったというのである。

しかし、京都大学の林屋辰三郎教授は、簡単にいうと蘇我馬子が交流を持った国はむしろ高句麗こうくわであり、その交渉経路は北九州、瀬戸内コースでなく、敦賀の港を窓口とした日本海コースであったとしている。そして、飛鳥の仏教信仰もおのずと高句麗系となり、その成果は飛鳥法興寺

にまでつながっていくというのである。もちろん、日本海コースはそれ以前から開かれており、高句麗が蘇我氏に近づいたというのも、南の新羅という大国が脅威となっていたからである。従って、この論理はそれなりに正しい。また、後になって渤海などの国はこの日本海コースによって、わが国と交渉を持つことになる。

しかし、天皇家が派遣した多くの遣隋船、遣唐船、遣新羅船、遣百濟船は難波津から出航して、瀬戸内に向かって帆を張ったことは史実である。事実、遣唐使は舒明天皇から宇多天皇の間（六三〇—八九四年）に一八回任命され、初期は一〇〇—二〇〇人、後は五〇〇人以上の使節や僧侶が派遣されている。また、外国の使節船が入港すると礼装した役人が船で海上まで出迎え、通訳を通じて歓迎式を行っていた。こうした光景は当時、海辺であった釜ヶ崎からも十分に見ることができたであろう。事実、推古天皇の時代に唐客が来朝し、約三〇艘の船を浮かべて、出迎えたとはいわれている。

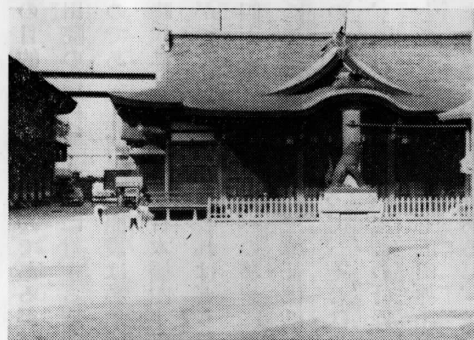
さて、四天王寺は最初、難波浦と呼ぶ堀江の船着場東岸に設けられたので「堀江寺」、その後、長岡の南端・荒陵の地に移建されたので「荒陵寺」ともいい、さらに難波の地に建ったので「難波寺」「難波大寺」と呼ばれていた。そして、四天王寺はこうに外国使節に対して、国威宣

揚の目的で建立されたのであるが、ただそれだけには終わっていなかった。仏教を広めるための敬田院のほかに、庶民に対する施薬治療のための悲田院も現在の国鉄・天王寺駅付近に設けられたのである。悲田院の開設は必然的に細民を四天王寺付近に結集することになる。ずっと後の徳川時代になって現在、日本橋四—五丁目と呼んでいる付近に、長町四丁（名護町）という超細民街がつくられている。これはどう見ても四天王寺と関係が無く誕生したとはいえない難いのである。

四天王寺の荒陵の地への移建に伴い、西の宮戎神社の分霊ともいわれている今宮戎神社、その横に神功皇后に従って三韓征伐に行ったという人物を奉る広田神社が設けられた。それは四天王寺の目と鼻の先であって、そこはまた海辺であった。そして、ここに今宮戎神社が建ったことから、後に釜ヶ崎も含めてこの付近一帯を、「今宮村」と呼称することになるのである。

ところで今宮戎神社も広田神社も、祭神は天照大神であるが、ともに海の神さまでもある。戎さまはもちろん海神であるし、三韓征伐で軍功があった人物というところ、名称は不明であるが水軍の一方の將軍ということができる。遣隋使や遣唐使、遣新羅使や遣百濟使、筑紫に向かう大宰府師や防人たちは、二つの海神に詣でて航海の安全、武運長久を祈願してから、瀬戸内に向けて出航した。隋書倭国伝に記されている聖德太子の「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや。云々」の国書を携えた小野妹子も、この難波津から出航したと見てよい。那具の

浜、三津の浜、住吉の浜の三浜を接船地とする難波津には、八十島のような州^すができており、その間を縫うようにして船舶が出入りしていた。このころ、釜ヶ崎は聖徳太子によって大坂七大地の一つに定められ、四天王寺の埋葬地とされたという説話があるが、それは必ずしも明白ではない。ただ、四天王寺が荒陵の地に移建されたことが、それ以後の釜ヶ崎に大きな変化をもたらしたことは事実である。



今宮戎神社

聖徳太子が没し、蘇我馬子も、推古天皇も去って、舒明天皇が皇位を継いだ二年（六三〇年）、大上御田歈^{いねがみのみたま}、慧日^{けいじつ}らの遣唐使を乗せた第一回の遣唐船が、難波津から出航している。その年、舒明天皇は皇居を飛鳥の岡本宮に移しているが、難波津には外国からの使節が頻繁に上陸している。瀬戸内は名実ともに日本の大動脈であった。大化元年（六四五年）、中大兄皇子^{なかのお兄のかみ}、中臣鎌足^{なかつくみ}らが蘇我入鹿^{いもか}を宮中で暗殺し、天皇家と並ぶなどの大きな勢力を持っていた蘇我一族はついに滅亡した。そして、大化改新が行なわれ、孝德天皇を中心とする権力者たちは人

心を一新するため、難波に長柄豊碕宮^{ながへらゆきのみや}を築いて遷都した。そこはかつて仁德天皇が難波高津宮を、欽明天皇が難波祝津宮を、推古天皇が難波豊浦宮を築いたと思われる玉造に近い法円寺坂付近である。この難波長柄豊碕宮が新たに開かれたのは、律令国家を築くために、先進国・唐の交流が不可欠であったからでもある。

日本書紀によると孝德天皇の白雉二年（六五二年）に「大唐に発遣す大使小山上吉士長丹、副使小乙上吉士駒、学問僧道嚴……併せて一百二十一人、俱に一船に乗る。云々」として、吉士長丹らが第二回の遣唐使として派遣されたことが記されている。たしかに、大使、学問僧、通訳、医師、船大工、雑役夫など一二人が乗れる遣唐船は、長さ約一五丈（約四六メートル）、幅一丈（約三・〇メートル）の木造の大船であった。これで那呉の浜にあった船着場のスケールのおおよその見当がつこう。さらに、那呉の浜は葦の生え茂っている州の間を縫って、「みおつくし」という水路標に沿って出入りしていたのだが、その船着場にはいつも何百という帆船が寄港していた。しかし、第二回の遣唐船が出航した日には、何千、何万という見送り人が押し寄せてきて、人の列はおそらく現在の釜ヶ崎付近にまでおよんだことだろう。

難波津を出航した一行は武庫浦^{むこうのうら}、大輪田泊^{おおわだのどまり}、魚住泊^{うおずみのどまり}、檀生泊^{むらおのどまり}、多麻の浦^{たまのうら}、神島^{こうのしま}、韓泊^{からのもり}、備後長井浦^{いのうら}、安芸風速浦^{あきのかぜはやのうら}、長門浦^{ながとらのうら}、周防国麻里布浦^{すおうのくにまきふのうら}、能毛浦^{のくまげのうら}、豊前分間浦^{ぶぜんわくまのうら}（以上、井上靖著『天平の甕』新

潮社、一一ページよりなど瀬戸内の美しい各港に寄港、停泊しながら、おおよそ半月もかかって筑紫の大津浦に入航した。普通ここからは渡航最終の準備を整えて、一つは朝鮮半島からか、もう一つは琉球からかのいずれかのコースで入唐するのである。しかし、吉士長丹と同時に出発した高田根麻呂らの第二船は大津浦に入ってから、琉球より南支那海を横切って入唐する計画で帆を進めたのだが、途中、薩摩の南の海で遭難し沈没したのである。

また、難波津にまつわる大きなできごととしては、天智天皇の斉明七年（六六一年）、唐と新羅の連合軍と戦う百済を救援するため、日本水軍がこの港から出発している。だが、この百済救援軍は天智二年（六六三年）に、唐の水軍と百済の白村江に戦って大敗している。この敗北によって、百済から多くの民が沓岐、対馬を渡り、瀬戸内を経由して、わが国に逃亡してきている。その後、大阪の南部に「百済郡」という郡名の地域が誕生しているが、それはこのとき帰化した百済の人たちが住みついたことによるといわれている。

白村江での敗北以来、わが国は対馬、筑紫方面の防衛を固めるため多くの防人を送っている。しかし、この敗北から二年後の天智四年（六六五年）、唐使劉徳高らが来朝するにおよんで、唐との和解の道が開かれ、遣唐使は再開されている。天武天皇の天武十年（六八一年）、唐から得た高度な知識をもとに、わが国にも社会組織や刑罰のあり方を定めた律令がつくられている。こ

うして、公地公民の思想を背景とした律令国家の基盤は着々と築かれ、わが国は天皇制を中心とした巨大な集権国家へと成長していったのである。

また、推古天皇の時代から白鳳、天平の時代にかけて、歴代の天皇が畿内を転々と遷都している。そのめばしい場合だけをかいつまんで紹介しても、まず推古天皇が即位したころに難波豊浦宮を築き、さらに歴史的にも明白なことは孝徳天皇が大化元年（六四五年）に難波長柄豊碕宮を築いて、遷都したことである。続いて、天智天皇が天智六年（六六七）に近江大津宮に遷都しているが、孝徳天皇が設けた長柄豊碕宮が難波にあったのは、次いで即位した斉明天皇が川原宮に移るまでのわずか二〇年間である。

天智天皇が崩御した後、その弟であった大海人皇子は、天智天皇の継子の大友皇子を近江大津宮に攻めて滅ぼし、天武元年（六七二年）、天武天皇として即位してから都を飛鳥浄御原宮に移している。いわゆる壬申の乱がそれである。

天武天皇の後であった持統天皇は、女性であったがなかなかの権力者であって、持統八年（六九四年）に唐都長安京をモデルとした藤原宮を、大和三山の間に築いて遷都している。天智天皇の四女であった元明天皇は、治世わずか八年余の短い期間であったが、同じく唐都長安京をモデ

ルとして、藤原宮よりひとまわり大きい都城を平城の地に築いている。そして、和銅三年（七一〇年）、未完成のままの平城京に移っている。

天平の時代に入っても遷都ラッシュは続き、聖武天皇は天平十三年（七四二年）、政情不安から山背国相楽郡に恭仁宮を築いて移り、翌年にはまた近江紫香楽宮へ、翌々年にはまたまた難波宮へ、その翌年になってやっと平城京へもどっている。聖武天皇は唐との交流にはずいぶんと力を注ぎ、遣唐船もこれまでの二艘から四艘に切り替え人員も五八〇名を一挙に送るといふ熱の入れ方であったが、天平十三年から十七年までの五年間に、なんと四回も遷都したのであった。その後、しばらくの間、遷都はなかったが、延暦十三年（七九四年）、桓武天皇が山背国を山城国と改め、そこに平安京を設けて移るまで、孝德天皇以来の難波京は存続していたのである。このことは現代の首都感覚ではなかなか理解し難いところである。そして、桓武天皇は政治の中心を平安京に移すとともに、これまで宮地（天皇の直轄地）であった難波に、改めて摂津守護職を置いて難波宮を廃止したのである。

いずれにしても、唐都長安京をモデルとして築いた藤原宮、そして平城京、これらは遣唐使が持ち帰った知識と技術によって完成したのである。また、律令国家も唐の制度にならって築かれたのは前述のとおりである。この間、唐に赴いた使節、学問僧、また唐から来朝した使節、高僧、

技術者の数は、数え切れないし、そのほとんどが難波津から出入りしている。唐招提寺の開祖・鑑真和尚もその一人であった。そして、孝德天皇が難波長柄豊碕宮を築いてから桓武天皇が廃止に踏み切るまでの約一世紀半の間、難波宮にはもちろん栄枯盛衰があったにしろ、大陸政策を推進する上できわめて重要な役割を果たしたのである。このため、釜ヶ崎付近を中心とする那具の浜は、白鳳、天平の時代を通じて最も栄えた時期と見ることができる。

ただ一つ考えられることは、高松塚古墳のあの美しい壁画を描いた高句麗の絵師は、裏日本の敦賀港あたりから上陸して、飛鳥に入ったかもしれない。また、聖武天皇の時代になって渤海が次々と使節を送ってきているが、彼らは日本海を横切って裏日本の越前、越後、能登半島、丹後竹野あたりから上陸し、大和に向かったといわれている。それは渤海という国が中国大陸の東北部にあり、わが国と交流する場合、朝鮮半島を通過することは新羅という大国が許さなかったためである。従って、わが国が中国大陸や朝鮮半島の国々と交流するとき、瀬戸内を経由する表コースと日本海を横切る裏コースの二つがあったということが出来る。こういったことから、郡昇作氏は「釜ヶ崎付近を中心とする難波の船着場は、日本の表玄関だった」といっているのである。そして、郡昇作氏はその著書『日本の玄関・釜ヶ崎』の冒頭で、「日本の表玄関は難波であった。そんな時代がながく続いた。その難波の正面玄関は今宮で、今宮の正面玄関は釜ヶ崎であっ

た。釜ヶ崎は立派な土地だった。それがいつの間にか悪い地名の代表みたいになってしまった。だが釜ヶ崎を陥れたのか。元どおりの立派な地名にして返してもらわねばなるまい。釜ヶ崎だけがあいらん地区であってよいわけではない。日本全国何の町も、何の村も、大都市の華やかな街も、場末の裏街も、山奥の小さな村も、海浜の漁村も、そしてどの工場も、どの飯場も、どこかの学校もみんな愛隣そのものであってもらいたいのである。

釜ヶ崎以外での不快な出来事による不満の蓄積が釜ヶ崎で爆発するに至る可能性がないとはいえないのである。そう筆者は思い込んでいたのである。云々」と記し、釜ヶ崎への深い愛情と、陥れた者に対して限らない怒りを示し、さらに騒動に対する見解として、釜ヶ崎を別視する一般社会にも強い反省をせまっているのである。

ともあれ、大昔、釜ヶ崎とその周辺は大陸との文化交流の上で、中国、九州地方などの西国を治める上で、古代日本を築く上で、さらに仏教をわが国に広める上で、重要な役割を果たした港であった。そして、釜ヶ崎とその周辺は外国船も含めた出船、入船でにぎわっていた。また、地名であるが、日本書紀によると元明天皇が平城京に遷都したころ、西成一带のことを「難波小郡三野郷」と呼んでいたとしている。平城遷都から三年後の和銅六年（七一三年）、難波大郡は東生郡と改まり、難波小郡を「西成郡」と呼ぶことになる。そして、ここがはじめて「西成郡」と

呼称され、釜ヶ崎一帯も西成郡に属することになる。しかし、「釜ヶ崎」という地名の由来について明らかにするには、さらに平安時代にまで下らなければならないのである。

桓武天皇が平安京に遷都し、それに伴って難波宮が廃止されたことは、わが国にとって大陸政策が意味をなさなくなったからである。このころからしばらくして、農民が租税を納めなくなり、律令国家では地方の人民が掌握できなくなってきた。すなわち、律令国家の制度的な矛盾が顕著になってきたのである。こうして、遷都から一世紀も下って宇多天皇の寛平六年（八九四年）、遣唐使に任じられた菅原道真は約三〇〇年も続いた唐との交流に再検討を加え、わが国はこれ以上、波濤を乗り越えてまで大陸の文化を取り入れる必要がなくなったとの建議を行なっている。そして、その後、遣唐使は中止されることになった。だが、菅原道真は後に右大臣にまで昇格したが、やがて大宰権帥に左遷されることになる。いよいよ左遷されることになったとき、都から難波に着いた道真は長岡の夕陽ヶ丘近くにある現在、安居天神の社となっている付近で休息し、それから那呉の浜に出て筑紫に旅立っている。この史実からしても平安初期の釜ヶ崎一帯は、まだ海辺であったと見てよからう。また、当時は新羅との関係が悪化していたので、壱岐、対馬方面の守りを固める必要があり、那呉の浜はその後方基地として重要な役割を果たすことになる。

遣唐使が廃止されてから三十余年も経過した延長五年（九二七年）、醍醐天皇の時代にわが国の行政および儀式全般に関する規範となる「延喜式」が完成し、律令に代わって新しく施行されることになった。この延喜式によって釜ヶ崎付近は「摂津国百済郡三野郷」と呼称されるようになる。このころになると、那呉の浜にはもう美しく飾られた遣唐船の出航を見ることがなく、かなりさびれはじめていたと思われる。そして、淀川と大和川から運ばれてくる土砂で、八十島のようになつていった葦の生え茂った州は、陸地になつていったのである。現在の大阪はこうして誕生した。

また、『今宮町志』によると、平安時代にこの地に住んでいた人たちは、京都の内裏に新鮮な魚を贈り、祇園神社にも積極的に奉仕していたと記している。このため、この地の住民を「今宮神人」と呼んでいたという。この朝役神役に功績があったことから、当時、住民たちには租税が免じられていた。この免税措置が後に徳川時代になつて、今宮村の住民が思い出し、同じように免税措置を取るようになると願ひ出て、その目的を達している。このことは別として、平安時代から釜ヶ崎一帯は年貢帳にさえ、閑却されるほどの寒村になつていたとも述べている。

さらに、平安時代の那呉の浜にはそこかしこに塩焼き釜があったとしている。この塩焼き釜は徳川時代に至ってもあったというから、釜ヶ崎は塩の生産地であったことがわかる。そして、釜

ヶ崎で生産された塩は、船に積んで淀川をのぼって京都に届けられていた。実はこの塩焼き釜がこの地にあったことから、「釜ヶ崎」と付せられたといわれており、釜ヶ崎という地名の由来について、いろいろな俗説が残っているなかで、最も正しいと思われるのがこの説である。

もちろん、いつの時代に、だれによつて付されたかはわからない。しかし、「釜ヶ崎」というのは決して幻の地名ではなく、海岸であったということから誕生した実際にあった地名である。「あいりん地区」という福祉志向のブロック名がつけられた今日でも、また昭和四十八年十一月一日、大阪市の行政区変更に伴い町名変更が行なわれたが、それ以降においても、ここにスラム的要素が残っている限り、「釜ヶ崎」という地名は減びることなく、住民の間で呼称され続けることであらう。